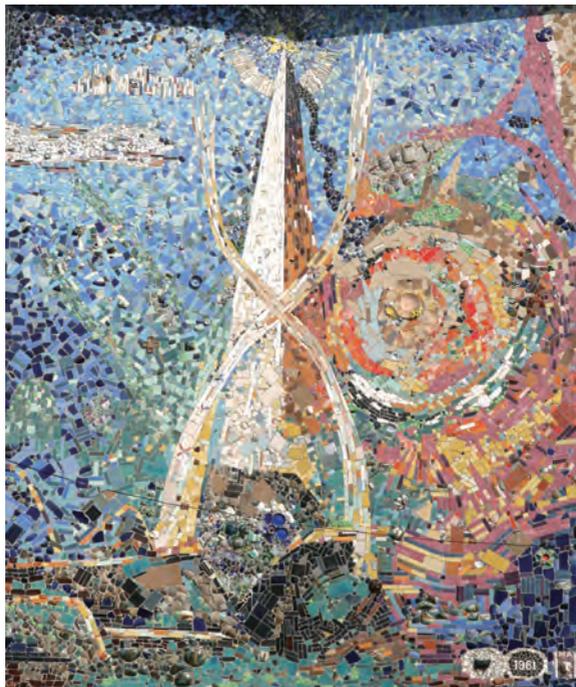


研究室だより

54



東洋学園大学



改装された1号館3階のGlobal Lounge（旧 English Lounge）



硬式野球部、東京新大学野球連盟2部リーグ優勝

目 次

1. ウクライナ危機と気候危機とエネルギー危機の位相 古 屋 力…… 2
～化石燃料卒業を通じた「脱炭素社会」構築に向けたパラダイムシフトへの序章～
2. ソフトパワーは日韓の垣根を越えていくのか 対 馬 宏…… 8
～バンタン、Niziu, 宮崎アニメ、そして梨泰院クラス～
3. 公開ウェビナー報告 川 口 智 恵……14
「紛争で傷ついた人々に対するジェンダー支援とは何か？
ーウガンダの難民支援から考えるー」
4. 男性心理学の観点からのSDGs教育の取組み 坊 隆 史……18
5. 入学前サポートプログラム「トーガクミーグリ」の報告 堀 口 真 宏……24
渡 邊 紳 也
6. 日本で最も受けられている二大中国語の 成 寅……29
検定試験の徹底比較
7. 流山の桜とりんど 佐 藤 泉……35
8. 東洋学園での36年間を振り返って 坂 本 ひとみ……42

※1、4、5、6は冊子でのみ公開しています。
PDFではご覧いただけませんので、ご了承ください。

ソフトパワーは日韓の垣根を越えていくのか

～バンタン、NiziU、宮崎アニメ、そして梨泰院クラス～

対馬 宏

バンタンという名のソフトパワー

バンタン少年団は一っ！、拡声器の音だけがむなしく響く。彼らを批判するおそらくは右翼の人たちの声だが、その脇を、若い女性たちが立ち止まろうともせず何人ともなく通り過ぎていく。向かう先はその当の少年団の東京ドーム公演。BTS といえ、いろいろな物議を醸すことの多いKPOPアイドルだが、その時は長崎に投下された原爆のシーンを描いたTシャツが問題視されていた。日本でテレビ出演が次々と取りやめとなり、この影響で紅白出演もなくなっている。もちろんそのことを知らない日本のファンはいないだろうが、拡声器に耳を傾ける人はいなかった。今の20代30代、あるいは40代以上の女性を中心としたファンにとって、「そうは言っても」なのである。

BTSの動向は、海外デビューの時から大きく報道されている。その優れた音楽性、完成度の高いダンスによりビルボードの上位常連となり、韓国政府から国連大使にも任命されるほどである。国連本会議場での特別パフォーマンスと演説、ホワイトハウスへの招待という異例の「出演」機会も得ており、そのことは日本のニュース番組の中でも芸能コーナーではない一般の出来事として大きく取り上げられていた。

ソフトパワー：今国際関係の中でキーワードとして注目される言葉の一つである。ハードパワーと並んで威力があるとされる

このパワーは、意図的に使えるものでもないようだが、中国のようにそれを戦略的にかつ積極的に自国の利益のために活用している国もある。孔子学院は世界中に拠点を置き日々中国の文化その他を海外で浸透させる役割を果たしている。実は韓国も韓国文化院を通じて世界に韓国文化を広めるのに躍起である。四谷の韓国文化院を訪ねれば予算がふんだんについているのが見て取れる。こちらでも韓国の伝統文化紹介イベント、韓国語講座と並んで、ほぼ定期的にKPOP、韓流の催し物をとりおこなって多くの集客を得ている。国家が後押しする輸出産業、海外ビジネスなのだ。BTSを例にとったこうしたソフトパワーの動きは国の思惑を超えて今後さらに世界に浸透していくのではないか。

このパワーは、日韓間にかかなりの影響をもたらしているようだ。ニッカン、世界で最も近い、そして、最も遠い国などと揶揄されるこの二カ国は、ソフトパワーの影響から無縁でいられるとは思えない。提唱者ジョセフ・ナイどころか、ソフトパワーという言葉すら聞いたこともない若い世代がこれに影響され、そして、自らもその中で一分子として作用し、さらに未来に新しい何かを伝えていく……。このようなことが今後続いていくように予感するのは私だけなのだろうか。

そして、もしかしたら、われわれ旧人類

はこうした転換点にたたずみ、その過程を目の当たりにして右往左往しているだけなのではないか。そう考えてくると、政冷経熱ならぬ政冷文熱の状態は、それを見ている大人たちがこわずか20年余りの間に起こっている現象などに巻き込まれまいと抗う様とすら思えてくる。歴史認識から始まる慰安婦、徴用工、そして、おそらくはこれに続くであろう、サハリン棄民、在韓被爆者の問題……。一方で、こうした動きとは関わりなく年々高まりつつある文化、とくに大衆文化のいわば相互過消費。さらにこの風景とはかけ離れた政府間での衝突の有り様は同じ時空を通して起こっている現象とは私にはどうしても思えないのである。文化交流、人的交流のパワーはその速度、規模の大きさを見ても、官製のものではないだけに迫力が違う。一瞬のうちに全てを氷解させその場の空気を変えてしまうのだ。

オーディションは語る

「残酷ですよ。」自宅近くのいきつけ韓国料理屋で映っていた韓国 Mnet の有線。そこから流れてくるプロデュース48のオーディション最終日、アルバイト店員の日本人女子大生は私の注文もほったらかしにして画面に釘付けになりながら語りかけてきた。昨日の夜の再放送である。

これから最終選考に残った12人の発表が始まるのだが、ご丁寧にも11番目から上に順々に発表され、最後は12番、盛り上げる手法には十分習熟している。もちろん、この最終回だけではない、日本側はAKBより39人、韓国側（米中を含む）57人から回数を重ねるたびにメンバーがふるい落とされてきた。しかし、最後のシーンは圧巻である。なんとといっても今までの落選メンバー

がほぼ会場にそろっているのだ。そのなかを、栄光をつかんだもののみが次々と名前を呼ばれていく。そのたびに、落ちたものたちとともに抱き合い泣きじゃくり祝いあう。おめでとうの声にならない声を選抜された方、されなかった方からスクリーンを通して刺すように伝わってくる。まさに、同志、いや、まるで「戦友」である。そして、ここぞとばかりにこの過剰とも思える感動的シーンを何台ものカメラが次々と抜いていく。

わかっている。およそ100人はいるであろうか、この何ヶ月の間にふるい落とされたメンバーたち。この中からもスピンアウトして、他のユニットが生まれる。ここで露出されることはすでにメンバーから外れているものたちにとっても生き残っていくための大きなチャンスなのだ。そんなことは重々わかっているにもかかわらず、ここにいる二人の視聴者は、被写体と完全に同化して画面に見入っている。

韓国語教室で一緒に韓国語を学んでいる主婦の一人が自分たちの様子を話してくれた。彼女によると娘さんと家族3人、その日は未成年メンバーがいることを考慮して午後8時からの生放送となっていた。夕食の片付けも済まし、お茶の間のテレビの前で並んでこの決定的瞬間に見入った。本人は第2次ブーム、ヨンセのオハクタン（語学堂）に在籍していたこともあるという娘さんは第3次からの韓流ファンご参戦とのこと。

なんのことはない。一人ひとり名前が呼び上げられる、ただそれだけである。その2-3時間のために、ご主人を巻き込んで、隣の国からの電波により家族団らんの時間がイベント化される。日本ではさほど普及し

ているとは思えない海外の有線放送によりである。こうした集団が日本中でいくつもあるのだろうか。一体この浸透力はなんなのだろう。

実は、事前に、このシリーズ第一回のオープニングを私は見ている。司会者が目覚まして起こされるというベタな振りから、いきなり、大仕掛けの演出が始まる。いわゆる典型的なオーディション番組であるが、日本とはいささか規模が違う。イベント興行はすでに国境をまたいだ文化の領域に達している。この手法が東アジアに広まっており、そのことが同地域の文化交流、国際融和にも一役買うということを題目にして卒論を書くものもいる。

そのオープニングでもう一つ驚かされたのが、番組テーマ曲の2番が始まったときであった。日本語なのである。

(あなたは)私のモノ……。メロディといい歌詞といい、ネッコヤ(내꺼야)から始まるそのお調子のよろしい楽曲の日本語が、未加工・無修正どころか、生放送で流れているのだ。

知識では知っていた。日本大衆文化開放なるものが韓国国内で進んできたことを。しかし、目の当たりにするとその破壊力に圧倒されざるを得ない。ウィンク、スマイル、狙い撃ち、私を見てと言わんばかりにあらん限りのポーズを日韓両国語で見せつけてくる。見る人によっては眉を潜めたくなるような光景。人生のはかなさを切々と歌い上げる演歌でもなければ、はるか郷愁を誘う童謡でも、昭和の懐メロでもない、ましてや、文科省推薦でもない。ガッチガチの今風アイドルなのだ。

私は思い出した。この大衆文化開放の先兵として、たけしの「HANA-BI」が韓国で

公開されたときのことを。満を持して、ベネチア映画祭黒獅子賞受賞作をひっさげの日本映画初登場だったのだが、劇場内は閑古鳥だった。そして、その後、宮崎アニメが放映されるとすぐさま劇場が一杯になったのである。

どうしたことだろう。反日教育を日々学び、あるいは、嫌韓メディアに薫陶を受けた世代ではなかったのか君たちは。それともそれらはただの都市伝説だったのか。36年間にわたる植民地支配のことを双方の練習生たちが知らないはずはない。それが、特訓を重ね、日本語そして韓国語の歌詞を完璧に習得し、このステージに全身全霊を傾けて、立つ。

戦後半世紀を経て初めて元慰安婦だと名乗り出た金学順氏の証言が一部で虚偽・妄言とされていること、ハルピンで前韓国統監伊藤博文を暗殺した国民的英雄安重根烈士が菅官房長官によってテロリストと表現されたこと、日本の皇居に当たる朝鮮半島の王宮景福宮で、日本の皇后に当たる閔妃が日本人の手によって暗殺されたこと。こうしたことを韓国人の候補者たちの何人かはどこかで聞いているはずだ。

舞台の袖で出番を待っているとき、彼女らの頭にこうした歴史認識は、そして、日韓の対立はどのように去来しているのだろうか。もし彼女らからそういう思いを一時的にでも麻痺させる力が働いたとしたら、それは一体何なのだろうか。

韓国における日本大衆文化開放とは

私は、日本大衆文化開放の経緯を素早く頭の中でたどっていった。1998年に金大中大統領が訪日し、小渕首相と日韓パートナーシップ協定を結ぶ。その後韓国国内では、

段階的に日本の大衆文化を開放することになるのだが、これが20数年前の話である。それ以前は、日本の歌謡曲は法令でまさに厳しく制限されてきた。自国文化保護と植民地時代の影響を考慮してである。むろん、公共放送では日本語の歌詞は内容を問わず禁止されていた。日本の保守政治家の中にはこれを批判する声も上がっていた。韓国発の日本での文化の浸透と比較して、日本大衆文化が著しく不当に韓国内で制限されているとの主張である。

これが四段階を経て緩和される。徐々にという表現が使われることが多いが、その後の日本文化の受容状況まで見ると、あっという間と言っても過言ではない。学生にあなたたちが生まれるちょっと前まで、日本語の楽曲は全面的に韓国国内で流せなかったと言うことを伝えるとそんなことがあるものかと目を丸くしている。

このことについて、卒業論文を書いた学生もいる。それによるとこの急速な日本大衆文化の浸透は、何もこの時期に開放されたから進んだのではないという。すでに、規制が緩和される以前から、十分、地下で浸透してきていたというのである。日本のコンテンツのカセットテープもVTRも市中でほぼ自由に手に入る。大学の文化祭ではごく普通に日本映画が流される。BS放送は海を越えて事実上の野放しの時代すらあった。

韓国より先んじて日本が欧米文化を取り入れ、表現の自由を満喫していたという事情もあるだろう。この開放は、金大中による韓国文化そのものへの対外開放、自由化だったのだろう。そして規制が外されたことはすでに広まり浸透していた現状を後追いしただけなのかもしれない。韓国は当時

から自国文化の海外進出、いわばグローバル化を標榜していた。この見返りとして自国文化の開放は当然の成り行きだったのだ。日本の大衆文化の開放はその象徴的な出来事ということが出来よう。

私がお世話になっている在日の韓国語の先生は、初めて日本に来て母国で慣れ親しんでいた多くのアニメが日本発のものであると知ったときの衝撃を語ってくれた。それまでずっと韓国固有の作品だと思って疑わなかった。登場人物の名前も台詞も韓国語として全く違和感がない。が、日本来るとそうであったはずの漫画やアニメが日本語で山のようにあふれている。鉄腕アトム、鉄人28号、マジンガーZ……。日本に来たから「本物」の存在に気がついたのだ。

お金を払えないから闇で流す、そして払えるが禁止されているから普通には流せないのやっばり違法に流す。そうした時代を経て、しっかり払って版權を買い韓国版「家政婦のミタ」「のだめカンタービレ」が合法的にリメイクで韓国の有線に乗っけられ放送される。それと同時に日本では韓流ブームが起り、2次、3次と続くうちに、いつの間にか、逆輸入が始まる。そして、最近では「梨泰院クラス」の日本版リメイク「六本木クラス」が、「リメイク」であるからこそ評判になるくらいである。さらにこのリメイク版が韓国に留まらずアジア各国へ配信されていく。

某マスメディアグループのBSを中心とした韓国ドラマの流し方、そしてその同じグループが同時に反韓・嫌韓と呼ばれる類いの番組を放送する……。このいわば多重人格をどう解釈したらいいのだろう。ある識者はこれを「やっかみ」と表現していた。そして、韓国内の日本に対する関心を「韓国

国内での日本というものの絶対化から相対化への移行」とも表現していた。どちらも言い得て妙である。経済で見た場合の日韓関係の微妙なバランスの変化が大衆文化の流れにも影響を与えるといわざるを得ないのだ。

以前は、紅白歌合戦でのKPOPを見てみると、流れがわかっただけ。毎年何組の出場者があるのかが、ちょっとした話題になっていた。多いときには5組も呼ばれていたのだ。これが李明博大統領の独島(竹島)訪問によって大きく変わる。日本国内の世論の反応の厳しさを背景として、一時は1グループも呼ばれなくなった。その流れに少し変化を見せたのは、2017年のTWICEの登場であり、先に触れたオーディションから出てきたグループNiziU(니쥬) ニジューの出演決定である。といってもNiziUの場合KPOPの衣をまとった日本人であることは皮肉とも言える。紅白のこうした動きをゼミ論・卒論で書いてくれたものもある。それによると、紅白での突然のKPOPグループ消滅は、必ずしも韓流ブームの低調を意味するものではなかったという。その間も韓国人グループの5大ドーム日本ツアー動員客数に目立った変化はなかったらしい。

大衆文化として確実に浸透し動き出した流れはそうそう簡単には止められないのだろうか。この先、例えば10年後を見たときにこうした様子はどう世間を動かしていくのであろうか。

例えば、これらを新型のソフトパワーとし、従来型のソフトパワーと対比させてみよう。日韓間には多くの人的交流が行われている。数日間合宿をして共通テーマでグループワークをするといったことも行われている。高校間での短・長期留学も行われ

ているし、自治体レベルで行われることも多い。ヘイトスピーチで悪名高き川崎市とプチョン(富川)市など177の日韓姉妹提携都市交流が起点になっている。こうした交流はコロナで下火にはなったものの、日韓関係が最悪と言われた近年は決して減ってはいなかった。由緒正しい交流は、新型のそれとどこが違うのであろうか。交流の感想などを見るに涙ナミダ、一生モノの体験となるようだがそれなら新参者も負けてはいまい。

従来型は公募があり、事業目的には相互のとりわけ人的交流に資する旨のくだりがあり、財政から予算が確保される。対して、新型はビジネス、歴然とした金儲けである。利益が上がらなければ行われない。人的交流の結果、相互理解が深まろうが薄まろうが、知ったことではない。ソフトパワーの中に権力・権威からの意向や相互理解の意義で計ろうとするならば、最もランクが低い部類に入るパワーであろう。踊っている当人たちにその自覚がないと言うことが何よりの証左である。

そして未来、私たちの心すべきことは

大学での日韓関連の取り組みも、このような影響を受けて、変わりつつあるようだ。うちのゼミ生でコロナ禍直前に滑り込みで半期留学を敢行したものもいる。いずれ、こうした学生たちがソフトパワーの最前線に躍り出る時代が来るのかもしれない。卒論のためにハンデルで韓国の学生にアンケート調査を行っている学生もいる。さらには、学部では、韓検(TOPIK)6級(最上級)を取得した学生も出てきている。私たちもより質の高い文化交流を促さなくてはいけないだろう。

ソウルのどこへ行った、何を見てきたという観光旅行まがいの体験を学生たちは求めているわけではない。というよりそういうことはすでに中高で済ませているものが来ているのである。単なる KPOP、韓流に飽き足らず、かといって、ソフトパワーも知

らず、しかし、ホンマもんの文化交流、人的交流を自ら進んで目指そうとするやっかいな人材の登場である。教壇に立つ側も心しておくべきであろう。

(グローバル・コミュニケーション学部)

追記：

本文中でも触れました“梨泰院”にて大変痛ましい事故が起きました。
謹んで犠牲者の方々のご冥福をお祈りいたします。

公開ウェビナー報告

「紛争で傷ついた人々に対するジェンダー支援とは何か？ —ウガンダの難民支援から考える—」

川口 智恵

東アフリカのウガンダは、武力紛争を起因とする人道危機から逃れた数多くの難民を受け入れている。特に隣国の南スーダンやコンゴ民主共和国から逃れてきた難民には、ジェンダーに基づく暴力（Gender-based violence: GBV）を受けた人々が少なくない。難民となり逃れてきた後も、難民居住地の内外で、ジェンダーに基づく暴力による被害を受けることもあり、コロナ禍でその数は増加しているともいわれている。このような現状に鑑み、紛争影響下社会でジェンダーに基づく暴力に傷ついた人々への支援とは何か、どのような支援が必要なのかを考え、具体的な支援内容と課題を理解するための公開ウェビナーを開催した。同時通訳を準備し、国内外への広報活動を行った結果、日本だけではなくアフリカやアメリカから 77 名の参加者を得た。紛争影響下の GBV についての知見を広め、支援への理解を得るため、各報告及び質疑応答を報告する。なお、本ウェビナーは、文部科学省科学研究費基盤研究 (c) 「人道危機をめぐるグローバル・ポリシーの比較研究」(代表者川口智恵) 18KT0057 と特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン (Peace Winds Japan: PWJ) の共催にて実施した。

登壇者は、以下の通りである。

- ・ 冒頭挨拶：石川雅恵 (UN Women 国連女性機関 日本事務所長)
- ・ 司会：池田文佑 (富山大学 准教授)

- ・ プレゼンター：川口智恵 (東洋学園大学 専任講師)、Chris Dolan (Refugee Law Project Director)、山本めぐみ (PWJ ウガンダ事業 事業責任者)
- ・ ディスカッション：上野友也 (岐阜大学 准教授)、ゴメス・オスカル (立命館アジア太平洋大学 准教授)

冒頭あいさつ

石川氏による冒頭あいさつでは、UN Women は SDGs の 5 番「ジェンダー平等の実現」と女性と女兒のエンパワーメントのために取り組む国連機関であり、平和・安全保障分野や人道危機発生時の人道支援プロセスへの女性の参画の取り組むとの紹介があった。「LEAP (Leadership, Empowerment, Access, Protection)」と呼ばれる危機対応下の女性のリーダーシップ、エンパワーメント、アクセス及び保護に関するイニシアティブと、ジェンダー不平等の危険性に取り組むイニシアティブがある。LEAP 事業は、日本政府や PWJ とも協力している。例えば、難民キャンプにおける女性のリーダーシップ、エンパワーメント、生計向上、保護を促進する事業や、女性エンパワーメントセンターの設立、暴力からの保護、カウンセリング、職業訓練等のサービスを実施してきた。職業訓練の一環として、生理用ナプキンの生産、芸術・工芸品を収入にするための活動、自動車の修理・メンテナンス訓練を行い、政府関係

者からも評価を受けている。このウェビナーが、持続可能な社会を作るために、ジェンダー平等と女子のエンパワーメントに関してできることを考える機会となることを願っている。

プレゼンテーション 1

川口智恵（東洋学園大学 専任講師）：「紛争で傷ついた人々に対するジェンダー支援の現状と課題—ウガンダの難民支援を事例として—」

GBV は最も一般的な人権侵害の一つである。2003 年国連難民高等弁務官事務所によると GBV とはジェンダーもしくは性別に基づき人に向けられる暴力であり、身体的、精神的、性的苦痛を与える、強制する、その他の自由の剥奪を含むような暴力である。女性、男性、男児、女児、全ての人々が犠牲者になりうる。紛争が生じると人々の脆弱性は高まる。コミュニティ、家族、パートナーや友人との間で GBV のリスクが高くなることもある。GBV が戦争の手段として使われることもある。新型コロナウイルスが猛威を振るう中、影のパンデミックとして GBV が広がったともいわれている。難民は、避難過程、一時避難先、帰還後など様々な段階において脆弱性の高い状態におかれる。難民は、各段階で GBV 被害の可能性が高くなる特別配慮が必要な対象である。

アフリカ最大の難民受け入れ国であるウガンダは、世界一寛容な難民受け入れ政策を持っている。受け入れている難民の約 60% は、隣国南スーダンから逃れた人々である。ウガンダは、難民に関するグローバル・コンパクトや国際援助を国内開発計画に取り入れ、国内政策化することで寛容政策を実施している。ウガンダの難民受け入れ政策の特

徴は、国民と難民の双方を対象とした支援を様々なアクターと協力して行っている点である。

コロナ禍により、GBV 被害が悪化している。現状の課題は、警察など暴力を取り締まる組織の不足、トラウマに対応するための精神衛生・心理社会的支援の不足、安全なシェルターの不足、保護施設の不足、事件報告の遅延、GBV 介入を困難にする文化的信念、コロナ禍による経済状況の悪化などが挙げられる。難民居住地と受け入れコミュニティの双方がジェンダー規範を普及し、より効果的な GBV 予防と保護に取り組むため、洗練された包括的アプローチが必要である。

プレゼンテーション 2

Chris Dolan (Refugee Law Project Director) : What is 'gender' assistance for people affected by conflict? - Leadership, Empowerment, Access & Protection for refugee women in Uganda: Successes and Gaps

RPL は、マケレレ大学に 1999 年に設立されたコミュニティ・アウトリーチ・イニシアチブであり、ウガンダ国内に 12 のオフィスと 210 のスタッフを持つ。RPL は、ウガンダの南スーダン難民居住区およびホストコミュニティ（アジュマニとユンベ）で、UN Women の支援の下、LEAP 事業を 4 年間にわたり実施してきた。女兒に対する教育への関心の低さ、難民生活における男性優位の構造の継続から、多くの南スーダン女性難民のエンパワーメントが妨げられている。RPL は、難民居住地の運営組織への女性の参画を促進する活動、難民男女に対して基礎英語や計算を教えるコースの開設、女性が暴力から身を守るための難民女性グループによる支援活

動の組織化、マルチメディアなどを使ったコミュニケーション技術訓練、ジェンダー平等や女性の権利に関する啓発活動などを行ってきた。これらの女性のエンパワーメントを促進する活動が一定の効果を上げる一方で、複雑なジェンダー文脈が覆い隠されてしまうというジレンマも存在する。人道危機下では男性も被害の対象となり得る。紛争影響下の人道支援におけるジェンダー平等とジェンダー支援について考える時、男性の脆弱性も考慮に入れる必要があるのではないかと指摘した。

プレゼンテーション 3

山元めぐみ (PWJ ウガンダ事業 事業責任者)「ウガンダ難民居住地区におけるジェンダー支援」

PWJは、ウガンダの難民居住区においてジェンダー支援を行っている。PWJは2016年12月からウガンダでの活動を実施、主にインヴェジ難民居住地区やチャカII難民居住地区で事業を行なっている。ウガンダでは難民キャンプでなく難民居住地区という難民と地元のホストコミュニティの人々が近い距離で生活している。そのため学校や病院などの公共施設を利用することが出来ることが紹介された。

難民及びホストコミュニティ女性の保護支援として、①女性支援センターの建設及び運営体制構築、マネージメント研修、カウンセリング研修、②女性用福祉相談窓口の設置運営、各村の女性達とのミーティング実習、相談員の育成、女性用福祉相談実施、③ジェンダーに基づく暴力の啓発活動、SGBVトレーニングやワークショップの実施、④生活能力トレーニングの実施、対象村の参加を希望する女性達の選定といった支援を行なっている。

女性支援センターは女性が気軽に訪問できる場所であり、GBV被害の早期発見により、迅速に支援に繋げることができる。

女性のリーダーシップやエンパワーメント、保護へのアクセス支援として、①ブロック詰み・セメント施工技術コースや電気設備技術コース、修了者へのスタートアップキット提供、情報通信技術基礎研修などの、生活能力トレーニングの実施、②ゴミ捨て場設置や道路の整備といった現金収入機会提供、③ジェンダー平等促進研修を行なっている。

さらに、トイレ環境・月経衛生管理も行っている。「学校のトイレ環境」の課題としては、質、数、安全性、衛生面、手洗い環境といったものが挙げられる。こういった課題への支援として、PWJでは安全なトイレや手洗いの場の設置、月経衛生管理も行なっている。月経衛生管理では更衣室の設置、月経衛生管理キットの配布、焼却炉の設置などを行なっている。

PWJは、今後もジェンダーに関する知識や必要な設備の提供など環境整備を行いながら女性の収入、知識の向上、女性の能力を伸ばしていくような支援を行なっていく予定である。

質疑応答

質疑応答セッションでは、ディスカッサントから、ジェンダー平等を実現することを妨害する要因の具体的な例はどのようなものがあるか、戦争手段としてのGBVと通常のGBVとは何が違うのか、PWJの学校のトイレ環境整備支援や女性の教育について阻害要因などについて質問があった。PWJの山元氏からは、ジェンダー平等を実現することを妨害する要因の一つ目は、偏見や固定思考がジェンダー平等に至る新たな考え方に結び付

きにくいこと、GBVは問題がある行動だということを知らなかったり、GBVをめぐる状況を変えたり被害から回復する自分の能力に気づいていないことがあるとの回答があった。また川口から、戦争手段としてのGBVは限定的で公的な戦略的意図を持ったものであり、特定の集団への虐殺や性暴力が挙げられる。逆に、プライベートなものだと、家庭内暴力や親密なパートナー間の暴力などがあるとの回答があった。

国際連合安全保障理事会決議1325（女性、平和、安全保障/Women, Peace, and Security: WPS）が2000年に採択されたことに伴い、日本政府や日本の国際協力NGOによる紛争影響社会の人々に対するジェンダー支援意識が高まっている。これに伴い、今回紹介したようなLEAPのような形で、日本政府、NGO、国連機関などが協力しながら支援の実践を積み重ねている。一方で、日本社会におけるジェンダー支援についての認識は、他の支援領域と比べるとそれほど高くはない。今回の公開ウェビナーには、研究者や実務家だけでなく、大学生や一般からの参加

もあった。ウガンダの難民居住地での具体的なジェンダー支援や日本発の支援の存在について理解を促進する一助となったと考える。

今年度から、東洋学園大学特別研究費として「紛争影響下の人々とジェンダー：援助ドナーと現地の人々の相互作用の視点から」と題した研究を行っている。国内外の有識者や実務家と意見交換を行いながら、紛争影響社会におけるジェンダーに基づく暴力やその予防・対処にかかわる支援について研究を継続し、研究および教育の場を通じて、紛争影響下社会におけるジェンダーに基づく暴力の理解促進に努めていく。

Public Webinar:
What is "gender" assistance for people affected by conflict? -In the case of Refugees in Uganda-

[Outline]
Date: Tuesday, March 1st, 2022, 4:00 p.m. – 5:30 p.m. (JST)
2000 a.m. – 10:30am. (LST)
Method: Zoom webinar (application required)
Language: Japanese (simultaneous interpretation in English & Japanese)
Participation fee: Free
Application fee: -

[Presenters]
Opening address
Ms. Sato Shizuka
Head of Office, UN Women Liaison Office in Japan
Moderator
Dr. Louise Becht (Associate Professor, University of Tojama)
Presenters
Dr. Chigami Kanaguchi (Assistant Professor, Toyo Gakuin University)
Dr. Chika Ozaki (Refugee Law Project Director)
Ms. Megumi Yamamoto (UW Uganda Country Representative)
Discussion
Dr. Tomoya Kamino (Associate Professor, Gifu University)
Dr. Oscar A. Gomez (Associate Professor, Rizkallahian Asia Pacific University)



※広報用英文ポスター。
上記写真はピースウィンズ・ジャパンの提供。

(グローバル・コミュニケーション学部)

流山の桜とりんご

佐藤 泉

I. 学生との別れ

流山キャンパスの話を書くのは、既に旧千葉キャンパスを知らない新しい教員や学生が増えている現在、無駄なことかもしれない。ほんのたわごととお許し願いたい。

教員をしていて、残念なのは優秀な学生を失うことである。二期生のT君、多くの学生に人気があったが、卒業間近にオートバイ事故で亡くなった。当時の副学長、宇田正長先生のご英断で、学籍簿上は欠番が出るが、T君のご家族が代わりに卒業証書を受け取ることは可能とおっしゃり、T君は同期の学生達と一緒に卒業することができた。

のちに、第2代学生部長の宮地治先生が亡くなられた時、旧6102教室で卒業生有志による追悼会が開かれ、T君のお母様も出席された。卒業後も二期生の人達はT君のご家族と折に触れ連絡を取り合っている様である。

同じくオートバイ事故で他界したK君の場合、卒業まで1年以上あったので卒業というわけにはいかなかった。ユダヤ系文学の研究者、北川典子先生のご協力もあり、旧学生会館近くに記念樹を植えることとなった。学生達にどんな木が良いのか尋ねると、実のなる木が良いという。放課後、クラブ活動の後、お腹のすいた後輩たちがその実を食べてくれることを期待し、りんごの苗木4本と、姫りんごの木、1本を植えた。K君の友人たちが寄付を出し合った。

残念ながら、流山キャンパス閉鎖の際、この5本の木を本郷キャンパスに移植することはできなかった。しかし、新たな学校法人に売却されるということで、そこで学ぶ若者たちが、りんごや姫りんごを味わってくれればよいのではないかと考えている。

Y君はインフルエンザで寝ていた。タミフルを処方されていたかどうかはわからない。お母さんにコンビニに行ってくると言っただけで、隣のマンションから飛び降りた。実は、Y君にはつきあっていた女性がいる、私の指導する学生だった。(当時は担任制。)ちょうど7月の期末テストの最中で、Y君からメールがあったらしいが、翌日の試験のため、早くに寝てしまい、そのメールに気づかなかったという。もし、メールに気づいていればと、自分を責めてしまい、それでも残りの期末試験も全教科受けたものの、それまで良好な成績を維持してきた学生とは思えない結果となった。9月からの授業も休みがちとなり、英語の教職課程を目指していたが、絶望的となった。

翌年の春、Y君の記念の樹を植えようとその学生に提案し、故郷のS県から桜の苗木を1本持ってきた。施設部の方に相談し、2号館(旧短大の建物)近くの中庭の大きな桜の木の前に植えさせてもらった。「Yちゃんの木」とその学生と私は呼んでいた。桜を植えた学生は、S県で準公務員の仕事に就いた。後追いをするのではと、卒業する

まではらはらしていた。例の携帯はY君の
声が入っているので、ずっと変えられずに
いると言っていた。

コロナ禍、2020年、2021年に入学した
学生達は、思い描いたような学生生活がで
きず、今年度卒業を迎える。2021年に編入
したS君は、悩み事がありますか、とオン
ラインで聞くと、「淋しい」と答えていた。
最初、オリエンテーションと数回の専門応
用演習（3年ゼミ）のあと、急遽オンライン
となり、ほとんど人と会わなかった。アル
バイトはしていたようだが、短大から編入
し、これから友人を作り、大学生生活を満喫
するはずが、全く予想とは異なる東洋学園
大生活となってしまった。高校時代にはバン
ド活動もしていたが、当時、クラブ・サー
クル活動はほぼ全面禁止されていた。9月、
ようやく若干の活動再開が認められ、軽音
楽のサークルでドラムを叩き始めた矢先、
お父様から学生支援課にご連絡があり、S君
の他界を知らされた。

国民の祝日だが授業がある日だった。編
入生のS君は知らなかったのだろうか。あ
の時、前日に「明日は大学がありますよ。
いつも通り〇〇〇〇教室に来て下さいね。」
と連絡していれば、S君は亡くならずすん
だのだろうか。サークル活動も始まり、少
し新しい友人ができて、もう安心と思っ
てしまったのがうかつだった。「回復傾向にあ
る時が一番危ないと言うでしょう。」とある
ベテランの教員に言われ、しまったと思っ
た。気丈なお父様は他の学生達への影響を
心配され、息子さんのS君が亡くなったこ
とは知らせても構わないが、どのように亡
くなったかは知らせないでほしいと言われ
ている。（この『研究室だより』を読み、初
めて知る同級生もいるかもしれない。）

S君は告别式を誰に知らせるかも含め、お
父様に書き残していたそうである。いろい
ろ本当に深く考えている学生だった。将来
はIT関係の企業への就職を目指してはどうかと話をしていた。

これより少し前、もう一つの別れを経験
している。留学生のXさんが、留学ビザの
更新ができないと入管から言われ、やむな
く故国に帰ることとなった。Xさんの場合、
東洋学園大学に入学後は順調に出席してい
た。日本語のハンディがあり、そこまで成
績が良好だったわけではないが、入管が危
惧するようなアルバイトに明け暮れ、大学
に来ない学生ではなかった。しかし、本学
入学前の日本語学校時代の出席率が悪か
ったことから、ビザの更新はできないとい
う判断だった。入学前のことに遡っての判断
というのがどうにも腑に落ちなかった。

帰国後、少しでも日本語を使うような仕
事に就いていてくれば、日本語学校から
四年制大学数年間の経験が生きることにな
るのが。

II. 留学生と日本人学生

留学生の多くにとっては、日本語のハン
ディよりも、いつまで経っても日本人の友
人ができないことが悩みの様である。宮崎
アニメで育ち、日本文化が大好きで留学先
に日本を選んだにもかかわらず、なかなか
友人ができない。同じ国から来た留学生同
士で仲良くなることはあっても、教養基礎
演習のクラスで日本人学生と一緒になっ
てもなぜか休み時間になると日本人学生は日
本人学生のグループで行動し、中に入れて
もらえないことが多いという。この『研究
室だより』を読んだ学生達が「ああ、そう
なのか。」と気づいてくれたらと思う。

留学生の人達がどんなことで困るか本学に学ぶ日本人学生に聞いてみると、以下のような答えが多かった。時間割やシラバスが出身国の言葉で書いてあれば、母語での授業があれば、教材にふりがながふってあれば、等々、それはそうである。しかし、もっと大きな悩みはいつになっても友人ができないことなのである。

一緒に声をかけて、お昼を食べてほしい。見かけたら声をかけてたわいもない話をしてほしい。放課後冗談を言ったり、好きな音楽の話をしたり。LINEのグループに招待してほしい。

ある女子学生がいつも同じ場所で出身民族の言語の雑誌を読んでいた。とても日本語が上手で英語もできた。授業が終わるとかつては教務課にワイヤレスのマイクを返しに行かないといけなかったか何かでいつも同じルートを通るので、彼女とほぼ毎週立ち話をする事となった。

ある時、うれしそうに、「先生、友達ができました。」と報告してくれた。それまではほぼ1年間、一人で休み時間を過ごしてきたことを知っていたので、私も嬉しかった。

お金のためではなく、日本語の練習のため、コンビニでアルバイトをしているとかつて言った留学生がいた。そうしないと、日本人と話をしないからと。そう言わせてしまう、日本人社会の閉鎖性が問題である。

近年、留学生のための奨学金があっても応募する人が少ない。出身国のGDPが日本より上の国の場合、留学生はそこまで生活費や学費に困っていない。生活に追われる苦学生のイメージが日本人の間で大きいように思われるが、もうかなり前に立場は逆転しているのではなからうか。アルバイトをしている人は、アルバイト先の留学生と

も仲良くなってほしい。

かつて家電量販店で万引きをしてつかまり、ビザ取り消しになった留学生がいた。この学生はこの事件より前、授業で一緒になった複数人の日本人学生に食事をおごっていたという。そうでもしないと日本人の知り合いが作れなかったのか。自分は親が金持ちだからと言っていたそうだが、その孤独を垣間見る思いである。

本学にも若干名のイスラームの学生がいる。日に5回のお祈りをどこでやっているのか。かつて勤務した大学の外国人留学生センターには2階に出入り自由の集会室があったし、大学の中央図書館内に小さい個室があり、絨毯があったのでお祈りができた。手足を洗う所も含め、今後、そういった設備が用意されたなら、より開かれた多様性に配慮した大学となることであろう。

III. 教員との別れ

まだ流山5号館で授業をやっていた際、廊下の反対側の教室でO先生が倒れられた。廊下の外が騒がしかったが、私は気にせず授業を続けた。後で、救急車で運ばれ、お亡くなりになったと伺った。授業終了後、教室にはO先生の革靴だけが教壇の上にきちんとそろえて置かれていた。

O先生は地球環境学を教えられ、1期生の有志と地球環境クラブを創設された。文科系でも環境問題を学ぶことができると示された。国際学会の動向など学生達に熱心に話された様である。地球環境クラブではオゾン層の破壊と紫外線の問題などを研究していた様である。

月に1回定期健診に行かれ、わざわざマイボトルの減塩醤油をお使いになり、学生が騒いでも怒らず、こころ穏やかに過ぎさ

れていた方が心臓発作で亡くなられた。どうか教員の皆様、くれぐれも健康にはご留意され、ストレスをお溜めになられませぬよう。

4年生諸君はこれから社会人になるので、自分に生命保険をかけ、入院しても生活が成り立つようにすること。健康診断は逃げないこと。定期的にジムに行くなり、職場と家との往復以外の場所を持つこと。

イタリアから帰国したばかりの横山和子先生*と私は、当時副学長の宇田正長先生に採用して頂いた。宇田先生も医者の不養生の生活であったことは、もっとお親しい方からお話頂くとして、学生委員会の慰労会(当時、教員と職員が参加)でここにこしていらっしやっただ顔を今でも覚えている。困ってもあまり困った顔をされたことがなかった。「癌の温存療法」と言われたのは言い得て妙。温存して頂いたからか、英米地域研究科は無くなったが、お蔭で最後まで務めることとなった。

日本学術振興会の長期派遣でイスラエルのヘブライ大学に客員研究員で行くことになった際、研究休職の順番ではなかったので、給与はいらないので行かせてほしいとお願いすると、何割かの給与を支払うので籍を残して行ってほしい。終わったら戻ってくるようにとおっしゃられた。

宇田先生、御本人ももう少し長く現職に留まりたかったであろうと推察する。その他にも勤務中、また退職後、他界された先生方がいらっしやる。ご冥福をお祈りする。

IV. 高校の先生方

以前は、高校教員との懇談会という立食式の顔合わせの会があった。主に指定校の学生を送り出して下さった先生方に自分が

教えている学生がどんなことを発言したり、レポートを書いたか、お話をさせて頂いた。出席率以外にも何か、その学生が成長していることをお伝えしようところからもリストを用意して臨んだ。各高校に進路指導の名物先生がいらして、毎回のように来校して下さった。学生達に〇〇先生に会ったと翌週伝えると、喜んでくれた。名物先生は学生達にとっても忘れがたい存在だったようだ。

高校訪問や出前授業にいらしている教員や職員の方々にはこの場を借りて御礼を申し上げたい。家庭訪問ではないが、その高校まで歩いて行くことで、ああ、あの学生はきっとこの自転車置き場に自転車を置いて、毎日通っていたのだな。そうか、この高校はこんな商店街の近くにあるのか。といった生活実態を知ることになる。

ある高校の進路指導部の先生で、英語科の方が毎年お年賀状を下された。英語を生かした受験や留学をめざすプログラムに生徒の方を送り出して下さり、本当に有難く存じている。進路指導部を離れるにあたり、次の先生に引き継がれた様で、今でも暑中見舞いと賀状が届く。

無駄な様でも無駄ではないこともある。課題を毎回きちんとやり、自分の意見を文章化でき、始業ベルより前に教室にいる学生がどこの高校の出身なのか。時々入学前について調べてみることもある。高校名を見て、納得する。

V. 個性豊かな学生たち

多様性にはさまざまな意味合いが含まれる。障がいの有無や種類、程度、それぞれ対応のし方も対応の必要性も異なる。LGBTQA+… それぞれ人により異なる。カ

ミングアウトを望む人もいれば、望まない人もいる。ごく親しい人にだけ語った人もいる。民族的背景、宗教的背景についても同じことが言える。

輸血を望まない宗教だと学生が教えてくれた際には、保健室の先生にだけは知らせた。体育が必修の頃だったので、もし大きなけがをした場合には、必要な情報かもしれないと判断したからだ。無事、4年間で卒業した。

心臓病の学生には、万が一の場合にそなえ、主治医の先生のお名前と病院名を教えてもらった。いよいよの場合には、救急車を呼ぶ際、その旨、伝えるつもりだった。この学生も何事もなく、卒業していった。

答案用紙にカミングアウトをした学生は、その後、話しにくることもなければ、継続して別の科目の授業を取るということもなかった。私から連絡を取ることを望んでいたのだろうか。そもそも、あれはカミングアウトだったのだろうか。いわゆる性的マイノリティの1人であることを解答の中で述べてはいるが、趣旨は、同じ性的マイノリティの中でも異なるカテゴリーの人々と理解し合うことが難しいと述べただけであって、それでどうにかしてほしいということではなかったと思われる。言わないだけで、我々のごく身近にさまざまなカテゴリーの人々がいる。

ゼミで1人の学生がほぼ毎回遅刻してきた。その学生が来るまでの間、雑談をすることが多かった。ある学生とよく話すことになった。その学生が最初の高校でクラブ活動が辛かった話や転校の経緯を聞いた。親には話していない模様。うつや不登校にはさまざまな要因がある。いわゆるアルファベットのあるカテゴリーであっても、それ

だけで不登校になると決めつけてはいけない。厳しい親や、運動系のクラブの厳しさ、厳しい校風…。成績は優秀だったが就職はせず、おじさんの小さな会社で手伝いをしているという。仕事を休みたくなる時に、理解してくれる存在がいることが重要だったのだろう。

民族的アイデンティティについて長く教えた。アフリカ系アメリカ人や、日系人やアメリカ先住民の人々がいて、日本にも在日韓国・朝鮮籍住民、在日華人、日系ブラジル人、中国残留孤児の二世、母親がボスニア・ヘルツェゴヴィナの出身者、フィリピン出身者、フィンランドの出身者等々いて、学生達のルーツも様々である。

Yさん、それまでいわゆる「通名(つうめい)」という日本人名で学生登録していたが、3年生で本名宣言をし、苗字はそのままだが名前をハンゲルの読み方に代えてもらった。

学生課(当時)への改名届の理由は「民族的アイデンティティのため。」である。ちなみにYさんは成績優秀で卒業式では答辞を読んだ。しばらく社会人として働いた後、アメリカに留学し、アマーフト大学で異文化間カウンセリングを学び、今は、I県で学校カウンセラーとして働いている。

日系ブラジル人の学生達は私の知る限り、真面目だった。英語の小テストで解答の字が日本人のどのクラスメートよりもていねいだった。英語の早口言葉の練習をした後、ポルトガル語の早口言葉を読んでほしいと頼むと、喜んで読んでくれた。

新聞配達をしながら四年間通った学生。(その後、カナダに留学。)弟がまだ中学生で、学校からのお知らせの紙を読めるのが自分だけなので週末に群馬に帰っていた学生。

将来、ブラジルに帰りたいからと、日本での就職をどうするか悩んでいた。

小中高とずっと地元の公立学校で他のクラスメートと学んできたので何も不自由しないと語っていた学生は、おそらく努力家なのだろう。どの科目でも評価が高かった。

学生の個性は障がいの有無や程度、出身背景だけではない。成績が常にGPAで4.2以上で、最後は小数点2けたの差で優秀賞を逃した学生は、高校の頃、お笑いの道を考えていた。家族に反対され、大学に進学したが、やはりどうしても吉本のNSC（吉本総合芸能学院）を受けたいと進路を決めた。学生の父親からは、なぜ子どもが就職活動をしなにかと心配されてお手紙を頂いた。既に本人の決心を知っていたが、就職課（当時）はまだ間に合う様々な就職活動の講座やイベントを知らせていると答ええた。

高校時代の相方とは別の道を選んですでに解散しているが、NSCに入ってから多くの芸人の場合、相方を見つけてプロを目指すそうで、学生も今は1人でネタ帳に書いたためているという。お笑いを生み出そうとする人達は頭のいい人達なのだろうと思う。さっさとNSCの入学金と授業料を作るため1年間だけ働くと、携帯の販売会社への就職を決めた。その後、デビューできたのか、まだ携帯の販売を続けているのか、何も知らない。

音楽活動を続け、科目登録はしてもほとんど授業に出てこなかった学生。7年目ようやく全国ツアーができることになったのでと退学して行った。柏の駅前で歌っていた学生は親の許可が取れたからとピザのメイキングのアルバイトを続けながら音楽活動をする生活を選んだ。他にも、池袋で歌っ

ている卒業生もいる。

VI. オンラインと対面

2019年12月頃には発生したらしい新型コロナウイルスは私たちの生活を一変させた。機械、特にコンピューター操作に疎い私は2020年5月から始まったオンライン授業で悪銭苦闘した。パワーポイントに声を吹き込むことも知らなかったし、S先生やM先生の助けがなければ、「エクスポート」が何を意味するかも知らなかった。

公開講座をオンラインでやるようになって卒業生の人たち、特に、遠方に住んでいる人達が参加できるようになり、とても有難く思っている。再試験があると知らず、イギリスに卒業旅行に行ってしまう、卒論指導をされたT先生に国際電話で呼び戻され、どうにか間に合った人は、今、公開講座の常連の1人になってくれている。

学園祭が流山キャンパスから本郷に移り、気軽に停められる駐車場がないと、子連れの卒業生は参加しづらいことを知った。オンラインには到底対面のにぎやかさや模擬店の呼び込みの活気はないが、地方在住者や子育て真っ最中で気軽に都心には出られない人々にとって、大学の様子を知る一助になっているらしい。

コロナ禍、ご家族に高齢者や免疫力の少ない方がいて、対面授業の出席を希望しない学生がいたことで、オンラインと対面の両方の授業の同時並行（ハイブリッド方式）というのもやらざるを得なくなった。オンラインの人と、教室にいる学生達をつないでのやりとりはとても難しかった。しかし、画面の向こう側で孤独に耐え、一人でスマホやパソコンに向かってる学生のことを考えると、少しでも双方向の感覚を味わっ

てほしかった。

今、現在、選択科目の一部がオンラインで開講されている。これは、いずれ将来、卒業生が科目履修生として聴講したり、資格取得のため、母校に戻って来たいと希望した時には有効な手段になるのではないかと考える。無論、通信教育の老舗の玉川学園大学や近畿大学では夏休みに必ずスクーリングを行っている。オンラインの受講とレポート提出だけで英語の教職課程や日本語教育等の資格付与は難しいだろう。どこかで対面の授業への出席も求めなければならないであろうと推測される。しかし、何科目かの必修をまずオンラインで、というのは可能かもしれない。

Ⅶ. さいごに

最後に未熟な若輩者を折にふれご指導下さった多くの先生方、職員の皆様、特に、何度か犯したミスのカバーして下さった職員の皆様、愚痴を聞いて下さった同僚の皆様、12時43分の総武線に間に合うまで残っていても通路の電気をつけておいて下さった警備担当の方、荷物を持って移動するのを心配し、エレベーターを押して下さった

清掃担当の方々、青天の霹靂の年3回の手術をカバーして下さった教員の皆様、至らない授業でも聞いてくれた現役及び卒業生の皆様に改めて御礼申し上げる。

桜とりんごは引っ越しできないが、卒業生たちがまたどこかで花を咲かせ、実をたわわにつけ、周囲の人々を楽しませてくれていることを願っている。

“Self-fulfilling prophecy”(自己達成的預言)という言葉がある。学生がホテルに応募したいと言った時に、「大丈夫。あなたならきつとなるる。」という、本当は内心大丈夫かな、と思っけていても、本当に内定を取ることができた。(1人ではない)

東洋学園大学は小さいが、山椒のように小粒でもピリリと辛い、存在感のある大学になると願い、終わりの言葉とさせて頂く。皆様、お世話になりました、本当に有難うございました。

注

※横山先生はFAOから帰国された。当時のニックネームは「イタリア娘」だった。

(グローバル・コミュニケーション学部)

東洋学園での36年間を振り返って

坂本 ひとみ

はじめに

私は1987年、29歳のとき、東洋女子短期大学の兼任講師として採用され、翌年に専任講師にいただきましたので、東洋学園には36年間お世話になりました。2006年3月末で東洋女子短大はクローズとなりましたが、その最後まで短大の専任でしたので、学園大に勤務した年数よりも、短大に勤務した年数の方が2年長い、ということになります。短大においても、学園大においても、教育、研究、学務の3分野において、さまざまな失敗をしつつも、多くの方に助けていただきながら、いろいろな学びを得て、今日まで勤めてこられたこと、心から感謝しております。この拙文においては、教育と研究を中心に、私が最もやりがいを感じたことを書かせていただきたいと思います。

教育

東洋女子短大は「英語に強い」「就職に強い」という枕詞をつけて呼ばれることが多かったのですが、2年間という短い期間に集中的に学ぶエネルギーを持った女子学生であふれており、人気の高い学校で、入試には5000名の受験生が集まりました。お茶の水や四ツ谷の駿台予備校の校舎を借りて入試を行い、私たち教員もそちらへ出向いて監督業務をしていました。

私は本郷の英語英文科の教員でしたので、

「英文講読」「イギリス文学史」などを教えておりました。が、大学院時代にテレビのレポーターをしたことがきっかけでのめりこんでしまったネイティブ・アメリカン研究のために、大学が休みとなればアメリカにでかけてフィールドワークをするという打ち込みようで、ついには「ネイティブ・アメリカン・セミナー」というゼミも担当させていただくことになりました。

2000年に、当時の学科長でいらした日高佳先生のご支援をいただいて、児童英語教育課程をスタートさせることになりました。民間の児童英語教育に携わっていた黄金井先生、イギリス児童文学ご専門の高橋先生、英語音声学がご専門の土屋先生、発達心理学がご専門の久富先生、流山のアメリカ人講師であった佐野キム・マリー先生が私とともにチームを組んでくださって、学生のみでなく、一般の方のための児童英語教育講座も運営しました。

児童英語教育課程を始めたのは、短大の応募者が年々減少していることを何とか食い止めたいという思いと、学生たちからあがった「小さい子どもに英語を教えたい」というリクエストの声に支えられてのことでした。しかしながら、女子学生が短大ではなく四年制大学にシフトし始めたモメンタムを止めることはできず、2002年、本郷と流山に一つずつあった学科が統合されて「英語コミュニケーション学科」となり、定

員も減らして流山を本拠地とし、本郷キャンパスには1992年から流山でスタートしていた東洋学園大学の現代経営学部を置くことになったのです。

流山の東洋女子短大がクローズになる直前に、Zさんという学生さんが入学してくれ、入試のときの面接官が私だったので、「児童英語教育を学びたいのです。」と熱をこめて語ってくれたときのことは、今も私の脳裏にくっきりと焼き付いております。彼女は、ESSにも入り、学園大学のESS部員と一緒に活動してくれました。卒業後は、オーストラリアに1年間、ワーキングホリデーででかけ、シドニーにある児童英語教員養成所にも通って資格をとり、帰国してからは大手の英語学校で採用が決まり、4歳から高校生までを対象として英語を教えていました。子どもが好きだった彼女は自分で勉強して保育士の資格もとり、保育園での仕事も始めました。流山キャンパスの近くで、私がいつも教育実習をさせていたみやぞの保育園で児童英語教師を募集したとき、彼女は、ほかの有名大学出身の競争相手をおさえてみごとにその職をゲットしてくれました。私が2006年に学園大に移ったとき、児童英語教育課程も学園大に引き継いでいただき、みやぞの保育園にも引き続き伺っておりましたが、Zさんもタイミングが合うと実習に合流してくれました。彼女が実に上手に子どもたちに英語を教えていたことが印象的でした。

学園大学では「児童英語教育ゼミ」を持たせていただき、こちらでもう一人、Uさんという人が英語を教える保育士になってくれました。本郷キャンパス近郊の保育園でアルバイトをすることでスタートし、卒業後、そこで採用していただき、保

育士試験にも合格しました。ZさんもUさんも実に努力家で、「児童英語教師になる」という夢をかなえてくれたことを私は心から嬉しく思っております。

「児童英語教育ゼミ」では男子学生も積極的に学んでくれていましたが、その中の一人、Sさんとの出会いも忘れがたいものでした。それは、私がオープンキャンパスのミニ講義担当で、エコバッグをテーマとした英語授業を行ったときのことで、Sさんは興味をもってくれ、リアクションペーパーにもうれしい感想を書いてくれていました。彼は、お父様がJICAのスタッフだった関係で、14歳から16歳までの3年間、ブラジルで過ごし、ポルトガル語も少しできました。1年生で「児童英語教育入門」を履修してくれたときにも熱心に授業参加してくれ、2年になったときには、「国際理解教育に興味があるので先生のゼミに入ります」という私のゼミを選んでくれました。彼とは、ブラジルのアマゾン熱帯雨林をテーマとし、環境教育をめざした英語授業を小学校でやる力をつけることを目標に、ともに準備をし、4年生の秋に、福島と東京の小学校で彼がみごとに教師役を務めて子どもたちをひきつける授業をしてくれたときは、大変うれしい瞬間でした。また、この成果をまとめて、卒論発表会でもいい発表をし、優秀賞を獲得することができました。彼の卒業時、お父様から、「息子は先生のご指導のおかげでとても伸びたと思います。」というお言葉をいただいたのも光栄なことでした。

2018年度から2022年度にかけての5年間、国際キャリアプログラム(ICP)の責任者を務めましたが、こちらの学生たちも私にとってはおかわりの深い人たちでした。こ

ここでは、Pさんについて書かせていただきます。彼女は、ICPの中で最初はそれほど英語力が高い学生ではありませんでした。が、ICP留学に必要な英語スコアをしっかりととり、アメリカのノースアラバマ大学に1年間留学しました。私は現地視察に行かせていただいたのですが、彼女がアメリカ人学生や教授とみごとにコミュニケーションをとっている姿、授業でわからないところはそういう人たちにとことん質問する熱心さを見て、実に頼もしく思ったものです。ふだんは大学寮で暮らしていましたが、この大学ではホストファミリーを訪問するというプログラムを提供していました。彼女は、7人も子どもがいるホストファミリーとすっかり仲良くなって信頼され、クリスマス休暇にはそちらに泊めていただいて、日本食を振る舞い、子どもたちの遊び相手をしてあげていました。卒業後は、コンサルティング会社に就職し、1年目から、自ら希望してインド駐在となり、現地の人たちにまざってばりばりと仕事をしています。2022年7月に、ICP2年生がインドの大学生とオンラインで交流をしたとき、彼女もゲストスピー

カーとして参加してくれましたが、後輩たちのために、留学についてや就職について大変的確なアドバイスをしてくれました。1年生のときから彼女を指導してきた私にとって、その成長した姿は実にうれしいものであり、教師冥利につきました。

研究

大学時代は、イギリス地域研究を主専攻、英語教員資格取得を副専攻として学び、大学院では英語英文学を専攻しました。東洋女子短大に就職した最初のころは、ヴァージニア・ウルフについての論文などを書いていましたが、大学院時代から始めたネイティブ・アメリカン研究に次第に没頭するようになりました。もっともよく通ったのは、アイダホにあるネスパース族の保留地であり、ここの住人であるアメリカ先住民たちとは長年の親交を持ちました。これが私の異文化コミュニケーションへの興味の発端です。アメリカの中にある異文化の人たちと日本人である自分がどうかかわるか、親しくなれたと思って、超えられない溝があることを認識し、悲しい思いをする瞬



写真1 2022年7月 ICP2年生とインドの大学生の交流会の様子。3段目左から2人目がPさん

間もたくさんありました。また、異文化の人たちを理解するためには、その人たちの歴史を知ることの重要性もつくづく感じ、英語という言葉は、彼らにとっては、もとの言語を奪われ、強制された言語であることにも思い至りました。

こうした私の学びが、1989年には、TBSテレビの「新世界紀行」という番組のレポーターに起用されるということにつながり、かつてはロデオの名人であった60歳の男性ジェシーと、彼の孫息子で12歳のフランクと3人で、オレゴンからモンタナまで、1877年に彼らの先祖が合衆国軍と闘いながら逃げた道のを馬でたどるといふ60日のロケに出かけることとなりました。

私がこのテレビ番組に出演したビデオクリップは、東洋女子短大のオープンキャンパスでも流してくださり、私は、「ネイティブ・アメリカン・セミナー」を開かせていただくことになったのです。

1993年9月から半年のサバティカルをいただき、渡米いたしました。アメリカ先住民研究者である大学教授から個人教授を受け、アイダホ以外の保留地をいくつも訪れ、ネイティブ・アメリカンの人々にインタビューすることができました。当時の短大の木内学長のご助言により、生後7か月の息子をつれての旅だったので、アメリカ南西部のナバホ保留地を訪ねたときには、やはり赤ん坊を育てている最中の女性と子育ての仕方について話すこともできました。私が子連れであったために、先住民の方たちも、より心を開いて話してくれたように思います。

アメリカ先住民研究の内容については、流山での公開講座で講演をさせていただいたり、紀要論文をいくつか執筆したりしま

したが、最も大きな成果は、世界思想社から1997年に出た『アメリカ研究とジェンダー』の中の一章「アメリカ先住民史における女性たち」です。実務能力の高い人たちは、部族政府の仕事に就き、保留地からアメリカの大都会に出張で何度も出かけていき、立派な仕事をこなして家族を養っています。彼らの伝統的な宗教と、新たに入ってきたキリスト教が彼らの心の中で融合していると話してくれ、アメリカ先住民のサインランゲージを使った「主の祈り」を小高い丘の上で私に見せてくれ、手ほどきしてくれました。彼らの生きる姿とアメリカの大自然を、学生たちにもぜひ見せたいと思い、東洋女子短大の学生と当時、兼任講師をしていた一橋大学や東京大学の学生を連れて、アイダホ・オレゴンを訪ねる旅も数回行いました。短大の木内学長や土屋先生も参加してくださった旅は特に忘れがたいものであります。

2000年から、子どものための英語教室を自宅で開きながら、毎週末、児童英語教育学会や諸々の研究会に出席しつつ学んでいた児童英語教育は、私の次の専門分野となりました。

自宅での子ども英語教室では、英語文化圏の祝祭日をテーマとし、子どもたちに英文法を教え込むことはせずに、歌や体を動かす活動、ゲームなどを用いながら英語を身につけていく教授法を用いていました。それは、今まで大学生に授業をしてきた英語教育とは全く異なり、日々の大学での英語授業にも生かすことができるポイントをいくつもみつけることができ、発想の転換も迫られました。

流山市は、大学と近くの小学校が連携して教育にあたるという方針を打ち出し、本

学は、八木南小学校とパートナーを組みました。2004年、この小学校から要請があり、私は、先に述べたZさんを始め、児童英語教育を学んでいた数名の短大生を連れて、小学校へ英語授業のお手伝いに伺うことになりました。学生たちを連れてこの小学校で授業をさせていただくことは、学園大学に私が移ってからでも継続しておりました。

小学校での英語教育にかかわるようになり、それまで私がやっていた児童英語教育ではものたりなくなっていたところへ、町田淳子先生との出会いがありました。彼女のホームページには、「楽しくて、かつ、深い児童英語教育」という目標が書かれており、国際理解教育をめざした英語教育というものを知ることになりました。この先生とともに2006年、「小学校テーマ別英語教育研究会」(ESTEEM)を発足させ、毎月1回の研究会を欠かさず開いて、日本の子どもたちにとって豊かで幸福につながる英語の学びを実践研究してまいりました。

賛否の主張が分かれていた小学校への英語教育導入でしたが、ついに2011年4月より、週1回の「外国語活動」が高学年で必修となり、2020年4月からは、この「外国語活動」が中学年におり、高学年は教科としての「外国語」を週2回学ぶこととなりました。このため、検定教科書が必要となり、私も東京書籍のNew Horizon Elementary 1,2の執筆委員に入れていただき、女性の編集長とともに、数えられないくらいの会議を重ねました。東洋学園大学の人文学部長でいらした浅野先生、脇山先生が中学版のNew Horizonに大きく貢献されていたので、その伝統を引き継いだことを大変誇りに思っております。

国際理解教育は、21世紀に入って、ESD

(Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) と称されるものへ発展していき、2015年に国連が採択したSDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標) が大きな牽引役となって本学の教育にもおおいに取り入れられることとなりました。中学3年生用のNew Horizonの裏表紙にもSDGsが大きくかかげられ、英語を学ぶ目的は、地球市民として、多様な人々と協働しながら地球レベルの課題を解決していくことだというメッセージが書かれています。この英語教育の考え方は、今や大学英語教育学会JACETにおいても踏まえられており、本学の国際キャリアプログラム(ICP)の教育方針にもつながるものとなっています。この考え方に基づいた英語教育を小学校や大学で実践してきましたので、それを発表するために、数多くの海外の学会にも参加させていただきました。英語教育は人間教育であり、平和教育であるという方向性が次第にメインストリームとなっていったことは、私の研究生生活において最もうれしいことであります。

おわりに

2012年の夏、アイルランド政府から奨学金をいただき、1カ月University College Corkに留学させていただきました。ヨーロッパの各国から来ている学生たちと同じクラスで学んだことで、グローバルな視点の重要性をさらに感じることができました。

学務としましては、東洋女子短大のときは長らくスピーチ・コンテスト委員長として、フェニックス祭において開催する英語スピーチ・コンテストの企画・運営、終了後のニュースレター作成に携わりました。年長者のスミス先生がいらしたのに私が委

員長に任命されたときに彼がおっしゃった「年齢などは関係ありません。最も適任な人がやるのがいいのです。」というお言葉は、今も私の心の中に響いております。2006年、学園大に移ると同時に国際交流センター長を仰せつかり、48歳であった私は全く自信がなく、一度はお断りしようと思いましたが、原田先生に励ましていただき、お引き受けしたことを記憶しております。2011年から3年間は、共用教研施設長。2014年から4年間は英語教育開発センター長、2018年から定年まで国際キャリアプログラム（ICP）の総括責任者をやらせて頂きました。学生のためにという気持ちだけが走りすぎて、他部署と連携をとりながら仕事

を進めることがうまくできなかったことが多々あり、お詫び申し上げます。

現在の思いとしましては、大先輩の女性が80歳を迎えて語られたお言葉「志いまだならず。ただ助けられて歩むのみ」という心境があたっています。いつまでたっても未熟な自分に忸怩たる思いがいたしますが、明日の自分は今日の自分よりもよい人間になれるよう努力することだけはやめずに前へ進んでいきたいと思っております。皆様への感謝を心に抱きながらこの拙文を閉じることとさせていただきます。

（グローバル・コミュニケーション学部）

『研究室だより』編集委員会

委員長	松本	純一		
委員	赤尾	充哉		
	飯田	明日美	朱	建栄
	坊	隆史	李	新建

表紙写真 正面玄関 フェニックスモザイク

■『研究室だより』 No. 54

■発行・2023年3月1日

■編集兼発行人・愛知 太郎

■発行所・東京都文京区本郷 1-26-3

学校法人 東洋学園 TEL 03(3811)1696

■印刷所・(株)光洋社 TEL 03(3269)0211